

はんにゃしんぎょう
『般若心経』について (十二)

野口圭也 (種智院大学客員教授)

IV. 『般若心経』と弘法大師空海 (二)

2. 弘法大師空海著『般若心経秘鍵』について (2)

①本書の概要

一般的には「『般若心経』に対する注釈書」と説明されますが、むしろ「『般若心経』を題材として空海自身の思想を述べた書」、と言う方が適切です。本書以外の『般若心経』の注釈は、いずれも『般若心経』を膨大な般若経典類のエッセンスを説いた経典、すなわち空海の言うところの「顕教」の経典にとらえ、大乘仏教の根幹にある空の思想に基づく解釈を加えています。しかし空海は、『般若心経』を呪文を主体とする密教経典としてとらえる立場から、その内容を解説しています。

本書は次のような構成になっています。松長有慶先生と頼富本宏先生の著述を参考にし、内容のあらましと共に紹介します。

1. 序 敬礼と導入、本書の主旨と基本的立場を述べます。
 - 1-1 帰敬序 最初の偈では、文殊菩薩と般若仏母に対して敬礼します。
 - 1-2 発起序 これから『般若心経』の意味を解説することを述べます。
 - 1-3 大綱序 仏の教えは自のうちにあるが、人々は気づかずに過ごしている。仏が導く方法は人に応じて多様である、ということの名文で述べます。
 - 1-4 大意序 『般若心経』の全体像を「般若菩薩の真言であり、その悟りの境地を明かすもの」という基本的立場から概説します。
2. 正宗分 経典の題名、説者・説処・対告衆、翻訳について解説します。
 - 2-1 経の題号 「佛説摩訶般若波羅蜜多心経」という題名についての解説です。
 - 2-2 説処・聴聞衆 この経は、誰が、どこで、誰に対して説いたかを説明します。
 - 2-3 翻訳の同異 いくつかの漢訳を挙げ、ことばの相違を指摘します。
 - 2-4 題名の余義 「般若心」とは般若菩薩の「心真言」である旨を述べます。
3. 五分の総説 経典を五つの部分に分ち、それぞれに名前をつけます
 - 3-1 人法総通分 「観自在」から「度一切苦厄」まで。悟りに到る四段階と、悟りに到るまでの時間、という五つの部分に分けます。
 - 3-2 分別諸乗分 「色不異空」から「無所得故」まで。さらに五つに分ちます。
 - 3-2-1 建乗 「色不異空」から「亦復如是」まで。現象と真実とが融合しあっている、とする華嚴宗の教えで、普賢菩薩の境地とします。
 - 3-2-2 絶乗 「是諸法空相」から「不増不減」まで。八種の両極端を否定留守中観思想に充てられ、文殊菩薩の境地です。
 - 3-2-3 相乗 「是故空中無色」から「無意識界」まで。外界の存在を否定し、すべては心のみであるとする唯識思想の立場で、弥勒菩薩の境地です。
 - 3-2-4 二乗 「無無明」から「無老死盡」までを十二因縁を悟る縁覚乗の立場、「無苦集滅道」を釈尊の声を聞いて道を得る声聞乗に充てます。
 - 3-2-5 一乗 「無智」から「無所得故」まで。『法華経』や『涅槃経』の教えに従う天台の教えに充て、観自在菩薩の境地とします。

- 3-3 行人得益分 般若を实践する人を顕教と密教に分け、般若の教えには「悟りの原因、悟りへの修行、悟りの実証、涅槃に入ること（因・行・証・入）」という、悟りに到る四段階が含まれていることを説きます。
 - 3-4 総帰持明分 「すべての教えが明（真言）に帰結すること」を説きます。
 - 3-5 秘蔵真言分 末尾の真言の意味を一句ずつ解説します。最後に「真言は不思議なり、観誦すれば無明を除く。一字に千里を含み、即身に法如を証す」という、有名な偈があります。
4. 問答決疑 「陀羅尼などの秘密のことばの内容を説明してもよいのか」「『般若心経』は顕教の經典であり、その中に密教の教えを説くのは不適切ではないのか」という疑問点を問答形式によって補います。
5. 流通分 本書を作った主旨をもう一度述べ、結びとします。
6. 上表文 「弘仁九年（818）」の年号が入り、本書を著作した経緯が記されていますが、古くから真偽が疑問視されています。松長先生も「空海の関知せぬところで付加されたことは疑いの余地がない」と述べておられます（p.77）。

参照：松長有慶『空海 般若心経の秘密を読み解く』春秋社,2006。頼富本宏訳注「般若心経秘鍵」宮坂宥勝監修『空海コレクション 2』ちくま学芸文庫,2004,所収。

②本書の特色

何と言っても、「大般若波羅蜜心経といっぱ、即ち是れ大般若菩薩の空心真言、三摩地法門なり」と「大意序」で述べているように、『般若心経』を密教經典と解釈する点が本書の最大の特色です。

『般若心経』自体は、般若空の教理を説く經典として、べつに密教經典として解釈しなくても読むことが可能です。しかし人々によく知られ、読誦・書写經典として人気のあった『般若心経』もまた密教の教理に基づくものである、と解釈することにより、仏教のすべての教えが真言密教に通じることを明らかにする意図があったと考えることができます。

『般若心経』の内容を仏教教理の発展段階に当てはめ、すべての教理を網羅したうえで、最終的に真言密教に帰結する、とする点も、『秘密曼荼羅十住心論』『秘蔵宝鑰』において仏教教理の展開を十の段階にまとめ、真言密教を最高位に位置づけた空海の根本的な思想や分析の方法論と共通すると言えます。

また、上に挙げた「真言秘蔵分」の「真言は不思議なり」の偈や、前回紹介した「大綱序」の「それ仏法遙かに非ず、心中にして即ち近し」の文、さらに本書冒頭の「文殊の利劍は諸戲を絶つ 覚母の梵文は調御の師なり」のような、真言密教の教理を端的に表す名文が多く見られることもまた、本書の大きな特色と言えるでしょう。

③読誦經典としての『般若心経秘鍵』

本書は真言宗各派で用いられている常用經典に収められています。すなわち、真言宗においては日々読誦すべき聖典として扱われているわけです。実際に松長有慶先生は前掲書の「あとがき」に、「小僧の時代に本堂で、内容も分からず、ひたすら読誦した経験をもつ」と記しておられます（p.215）。頼富先生の訳注にも「加持祈禱に適した聖典として広く信仰されたようである」「祈禱にしばしば読誦される」と書かれています（前掲書p.315）。また成田山新勝寺では「毎月、初戌の日の朝勤行において読誦されている」そうです（松本照敬訳注「般若心経秘鍵」,『弘法大師空海全集』第二卷,筑摩書房,1983,p.612）。